

高江ヘリパッド

早朝強行住民怒り

「なぜ話し合わない」



作業現場前で押し問答する「ヘリパッド」をいらぬ住民の会のメンバーと
沖縄防衛局職員。22日午前7時半、東村高江のN1地区へのゲート前

【東】漆黒の闇の中、わずかな明かりに照らされて重機がこめく。無機質な機械音が森の静寂を破る。夜も明けぬ22日午前6時半前に始まった東村高江でのヘリコプター着陸帯（ヘリパッド）建設工事に、駆け付けた「ヘリパッドいらぬ」住民の会のメンバーは憤る。国との訴訟で裁判長が「実力行使が妥当とは思えない」として国と住民の対話を促してひと月もたたない中で「不意打ち」に住民は「これが民主主義か」と悲憤な声を上げた。

盛り込みは毎日午前8時から始まる。「未明に強行するのは不意打ちだ。主張が正しいと思ってるなら堂々と来るべきだ」。住民の会の伊佐真次さん(48)は悔しさをにじませた。防衛局はヘリパッド建設予定地のN4地区とN1、G、H地区へのゲートの2カ所で作業を始めた。道路の片側を封鎖し、防衛局職員と作業員をそれぞれ約50人配置。阻止行動を警戒し、1列に並んで腕を組んだ。

午前6時45分ごろ、作業に気付いた住民の会会員が駆け付けた。「なぜ話し合わないんだ」。詰め寄る住民らを前に、防衛局職員は「作業中なので中には入れません」と繰り返した。高江区公民館には午前8時40分、東村役場には午前9時ごろに防衛局から電話連絡が入った。浦崎永仁区長は「(負担軽減策など)要請が誠実に実行されるなら表立って反対しない。ただ、工事の予定や要請した事業とどちらが先になるのかは確認したい」と話した。伊集盛久村長は示した。

「県民の怒りに火」関係者

国が東村高江でヘリパッド工事を強行再開したこと、県内の関係者は強く反発した。住民側弁護団の横田達事務局長は「工事再開は暴力的だ。裁判所から求められない(妨害の)立証をしないまま実力行使して法治国家と言えるのか。不当な訴訟であることを自ら表している」と糾弾した。

沖縄平和運動センターの山城博治事務局長は「県民の神経を逆なでする行為」と指摘。「県民の反発は小さい」とこの国の見方にも「県民を愚弄している。県民の怒りに火を注いでいる」と話した。県平和委員会の大久保康裕事務局長は「閣議のようなやり方で強行するのは道義上あってはならない」と反発。「(米軍普天間飛行場の)『辺野古移設は進んでいないが、基地強化を進めている』というトナリ

米国にアピールするためではないか。自公政権と同じで住民でなく米国の方を向いている」と批判した。